

もう一つの印刷の世界

— 祈りや信仰と結びついた印刷

印刷は、「伝えたい」「知りたい」情報を、人々に伝えるコミュニケーション・メディアとして、社会や文化の発展に大きく貢献してきました。

しかし、印刷は、自らの心の想いを託す、あるいは表現する、自己コミュニケーションとも言える側面も併せ持っています。それは、祈りや信仰、宗教と深く結びついた印刷の世界でもあります。日本における印刷との出会いは、こうした印刷の世界であり、デジタル化が進む今日に至るまで、長く受け継がれています。

今号では、祈りや信仰と深く結びついた、もう一つの印刷の世界を、日本を中心に紹介します。

仏教と結びついた印刷

日本における黎明期の印刷は、仏教と深く結びついていました。そこには、善根を積めば積むほど、仏の功德が得られる、数が多ければ多い程、願いが叶えられるといった仏教における思想が、一つのものから同じものを数多く作り出す、複製行為としての印刷と結びついた姿が見られます。その代表的なものとして挙げられるのが、百万塔陀羅尼の印刷です。

印刷された年代が明確な(770年)、現存する世界最古の印刷物としても名高い百万塔陀羅尼は、天災や疫病、内乱が続く乱れた国内を、仏教の力により平安にしたいと願う、孝謙太上天皇の発願により行われた国家事業でした。延命や除災を願う経文である「無垢淨

百万塔陀羅尼(塔と陀羅尼)



光陀羅尼經」に説かれている造塔・写經の功德を期待して、陀羅尼を百万枚印刷させるとともに、木製の小塔に納め、法隆寺などの寺に分置させたのです。それは、百万という数に願いを託した天皇の熱い思いが、印刷に込められた姿と言えるでしょう。

もっとも、当時は、仏の功德を得る行為として、数多くの経文を写す「写經」が盛んに行われていました。しかし、百万枚もの陀羅尼を写すことの難しさから、その代わりとして、複製行為である印刷が用いられたと考えられるのです。

百万塔陀羅尼のように、数への祈りが印刷と結びついたものに、印仏、摺仏があります。印仏とは、阿彌陀如来などの仏像図を印として版木に彫り、ハンコを押すように紙に一体、一体繰り返し印したものです。一方摺仏は、何体もの仏像図を版木に彫り、その上に紙を当て、摺り写したもので、どちらも平安末期における末法思想(釈迦の入滅後の仏教流布の期間を三区分した、最後の時期である末法に入



阿彌陀如来坐像摺仏(左)、印仏(右)

ると、仏法が衰え乱世となるという仏教の予言的思想)を背景として、僧侶や貴族の間に登場してきたものです。

こうした思想のもと、善根をより多く積んだ者が仏の功德を得られ、生き残れるといった考えが高まり、多くの仏像や塔を造ることが行われました。しかし、多くの仏像を造ることは、時間や労力、費用がかかることから、その代わりとして、多数の仏像を紙に押し、摺ることで、仏の功德を願う、印仏、摺仏が行われたのです。

このように、黎明期における日本の印刷と仏教との関わりには、数への祈りというものが、深く関係していたと考えられるのです。



鯰絵「地震御守」



疱瘡絵「桃太郎」

民間信仰の拡がり印刷

長い年月とともに、仏教は民間にも拡がり、仏の力にすぎない民間信仰が生まれました。さらに、土俗的な神々や、民間伝承の神々への信仰も高まり、生活に深く浸透していきました。こうした民間信仰は、庶民文化が開いた江戸時代に至って盛んとなり、災いや不幸から逃れたい、幸福を招きたいといった人々の祈りや願いが、印刷と本格的に結びつき、数多くの印刷物を生み出し、広く利用されることとなったのです。

中でも、恐ろしい疫病(流行病)や地震、天災といった避けられないものに対する、護符の役割を担った版画は、神仏に頼るしかなかった当時の人々の祈りや願いを助けていました。当時流行した疱瘡や麻疹といった疫病を除ける効力を持たせた疱瘡絵や麻疹絵、地震除けの護符の役割を担った鯰絵などは、その代表的なものです。

このように人々の祈りや願いが印刷に込められ、数多くの印刷物が生み出された背景には、本尊や祭神、民間伝承の神々などの像をシンボル化し、印刷することで、これらの神々が持つ霊力を持たせ、その神秘的な力を発揮させようとの意図があったと思われます。そうすることで、人々は、本尊や祭神が

まつられている神社仏閣を訪れることなく、家に張ったり、持ち歩くなどして、いつでも、どこでも神仏の御利益にあやかることができたのです。また、当時、質・量ともに高まりをみせた、木版印刷の技術が、こうした印刷物を多くの人にもたらす役割を担っていたことも見逃すことはできません。

中国、西洋に見る祈りの版画

印刷が、祈りや信仰、宗教と結びついた姿は、日本だけでなく、印刷発祥の地である中国や、西洋においても見ることができます。

中国では、古くから、年画と呼ばれる、厄除けや招福といった縁起物の版画が、民間において利用され、今日まで伝統



「聖クリストフォルス」複製(原資料所蔵先: The John Rylands University Library of Manchester)



中国年画「秦叔宝門神・尉遲敬徳門神」

的に受け継がれています。この年画は、商売繁盛や長寿祈願、災難・病魔除けを願って、正月に、門や扉、家の中に張られるもので、福を授ける神や、悪霊を祓う神、吉祥的な図柄などが摺られています。

一方、西洋では、木版印刷が登場した1300年代末から1400年代前半にかけて、キリストや聖母子、聖者の像を摺って、彩色を施した木版画が、人々の間に広まり、礼拝像やお守りとして利用されました。これらの木版画は、ここに紹介している西洋最初期の木版画「聖クリストフォルス」のように、魔除けの役割を与えられ、家の門口や、屋内に張られました。

以上のように、印刷は、洋の東西を問わず、その誕生から今日に至るまで、祈りや信仰、宗教と深い関わりを持ってきました。こうした印刷の世界は、私たち人間が、長い歴史を通じて、心の想いや気持ちを印刷に込め、表現してきたことを改めて教えてくれるものと言えるのではないのでしょうか。

文: 緒方宏大(印刷博物館学芸員)

●参考文献

- 『プレ・グーテンベルク時代』1976年 鈴木敏夫 朝日新聞社
- 『日本印刷技術史』1999年 中根 勝 八木書店
- 『江戸のはやり神』1993年 宮田 登 筑摩書房
- 『疱瘡神』1995年 H・O・ローテルムンド 岩波書店
- 『中国の年画—祈りと吉祥の版画』2001年 樋田直人 大修館書店
- 『印刷博物誌』2001年 凸版印刷株式会社